

- 会議名 令和2年度 第2回丹波市社会教育委員の会議
(丹波市教育委員と丹波市社会教育委員の意見交換会)
- 日時 令和2年12月22日(火) 午後1時～2時40分
- 場所 山南住民センター 集会室
- 出席者 教育長、教育委員：5名
社会教育委員：8名
関係部署：教育部(教育総務課、学校教育課)
まちづくり部(市民活動課)
- 内容
 - 1 開会
 - 2 教育長あいさつ
 - 3 自己紹介(丹波市教育委員・丹波市社会教育委員)
 - 4 社会教育委員・地域学校協働活動推進員 松本委員による活動報告
「自分なりの地域と学校の連携・協働の形 ～学びを深める・学びを還元する～」
 - 5 意見交換
 - (1) 地域と学校がパートナーとなる連携・協働について
 - (2) コミュニティ・スクールの推進について

【意見】

- ・地域学校協働活動推進員に頼りすぎず、皆が地域を作り、子どもを育てるという意識を持っていただきたい。
- ・子どもが卒業すると学校との関係が途絶える。コミュニティ・スクールは横断的な組織になってほしい。
- ・地域だけが積極的に動いても上手くいかない。学校側も地域に入っていくという意識が必要。
- ・校長だけでなく現場の先生とも関係性を築かなければ、地域の方が学校に入り活動しても上手くいかない。
- ・地域の方が学校の中に入っていける工夫として、学校に地域の方が集える部屋を作ってはどうか。
- ・校長がもてなさなくても、学校に地域の方が集まってくるような関係になってほしい。
- ・学校は「敷居が高い」イメージ。
- ・地域の方が子どもを見る機会を増やす。

例：田植え→稲作→餅つき（年間を通した行事）

- 学校のスケジュールがすでに詰まっていることが多く、外部（地域から提案することに躊躇する。
- 日々の生活の中で子どもが学校に滞在している時間は実は限られている。→地域、家庭がどれだけ当事者意識があるかが重要
- 学校は社会に開かれるべきだという意識がコミュニティ・スクールや新型コロナウイルスの流行をきっかけに高まった。今動くべきという危機感がある。
- 学校は敷居が高いが、先に学校の中に入って活動している地域の人が入ると入っていきやすい。
- 地域の方が子どもと関わり、顔見知りになる機会を作ることで、学校に入っていくやすい雰囲気を作れるのではないか。
- コミュニティ・スクールという言葉が保護者にまでは伝わってきていない。まずは保護者に知ってもらうことが必要。
- コミュニティ・スクールを広く知ってもらうには、新聞や広報などで繰り返し発信していくことが必要。
- 学校の先生は何年かごとに変わる。長いスパンで地域に関わり、活動してくれる人が必要。
- 大人は子どもを未来の地域の担い手と認識し、当事者意識を持って関わってほしい。
- 学校に入り活動することで、子どもたちの方から挨拶してもらえることが増えた。学校だけでなく、地域も敷居を下げる努力が必要。

6 閉会